

外国人児童生徒等リーダー研修

検証実施機関（団体）：浜松市教育委員会
 浜松市教育委員会 指導課 高島 美保

1 検証対象の研修・授業について（該当するものにチェックを入れてください。）

養成／研修	<input type="checkbox"/> 養成 <input checked="" type="checkbox"/> 研修
タイプ	<input type="checkbox"/> 基礎教育 <input checked="" type="checkbox"/> 専門教育 <input type="checkbox"/> 支援員教育
研修・授業日（期間）	平成30年 5月23日 ～ 9月12日
総時間数	9時間（3時間×3回）
研修・授業科目名	外国人児童生徒等リーダー研修 5/23「特別の教育課程と校内体制づくり」 「JSLカリキュラム研修」 6/20「外国人児童生徒等への生き方指導」 「外国人児童生徒等への指導と発達支援教育」 9/12「DLA研修」
受講者	人数（ 10人 ） 年齢層：30代～50代 外国人児童生徒等教育の経験：10人 日本語指導（成人対象を含む）の経験：10人

2 地域及び学校現場の外国人児童生徒等の受け入れの状況

(1) 当該自治体における外国人児童生徒等の数・分布とその民族背景

平成30年5月1日 現在

小学校1186人、中学校541人 計1727人

ブラジル48.6% フィリピン17.0% ペルー11.2%
 ベトナム9.4% 中国語6.5% インドネシア3.0%
 その他4.2%

(2) 当該自治体における外国人児童生徒等の受け入れ・指導体制（H30.7.1現在）

- 外国人児童生徒指導加配教員37人（小学校29人、中学校8人）

※特別の教育課程に基づく指導を行う。

- 支援員14人（ポルトガル語13人、タガログ語1人）

※1日6時間、週5日間学校に常駐し、学習支援、通訳、翻訳等を行う。

- 就学サポーター22人（ポルトガル語9人、スペイン語4人、タガログ語5人
 英語1人、ベトナム語1人、インドネシア語1人、
 中国語1人）

※1日4時間、各学校を回り、学習支援を行う。通訳翻訳等も行う。

- 初期適応サポーター11人（ポルトガル語4人、タガログ語3人、中国語1人、
 ベトナム語1人、インドネシア語1人、スペイン語1人）

※来日したばかりで日本語が分からない児童生徒への、初期日本語指導を行う。

(3) 外国人児童生徒等教育に関わる教員（一般教員を含む）、支援員の教育力の課題

<児童生徒担当教員>

- ・毎年担当が変わる学校では、どのように指導やコーディネートをしたらよいか分からない教員が多い。
- ・経験のある担当教員でも、指導する人数が多すぎて、どのように外国人指導をしたらよいか分からない。

<一般教員>

- ・外国人指導は外国人担当がやるもの、と考えていることが多い。
- ・ある程度話すことができる児童生徒対応でも、通訳を介さないと指導できないと考えている場合がある。
- ・外国人指導＝文型指導と考えている人もいる。

3 研修・授業の成果について

(1) (受講者アンケートより)

①受講者の研修への期待（アンケートのⅠより）

<6月20日 生き方指導、発達支援教育>

- ・支援体制や手立てを知り、校内での支援をスムーズに運営する力をつけたい。
- ・外国人児童生徒について、少しでも多くの情報を得て指導に生かしたい。
- ・保護者や児童生徒が、受け身ではなく自立していくような意識改革のヒントを得たい。
- ・学習が身に付かない児童生徒への指導、支援の仕方について。
- ・発達の問題か言語の問題か分からない児童生徒への指導の仕方、見極め方。

<9月12日 DLA研修>

- ・DLA結果の生かし方（授業での具体例等）を知りたい。（多数）
- ・一人一人の力を的確につかむ方法を身に付けたい。
- ・DLAを行った後の対応の仕方を知りたい。
- ・DLAの評価の仕方を知りたい。
- ・DLAの具体的なやり方を知りたい。

②受講者の研修内容の理解度・満足度（アンケートのⅢ①より）

<6月20日 生き方指導、発達支援教育> ア…4人 イ…6人

<9月12日 DLA研修 > ア…4人 イ…6人

ほぼ一致、大体一致がほとんどを占めた。

③関心を高め、教育力の向上を促したと考えられる内容・活動（受講者アンケートⅢ②の回答より）

<6月20日 生き方指導、発達支援教育>

- ・子供の困り感やそれに基づいての表れをつかむこと。
- ・ケースに応じて支援、指導することの大切さ。
- ・子供の様子をしっかりと見て、話を聞くこと。
- ・具体的な話を聞くことができたこと。

<9月12日 DLA研修>

- ・指導の前後でDLAを行うということを学んだ点。
- ・読書習慣について、様々な方法を考えたこと。
- ・講師の先生の実践を聞いたこと。(多数)
- ・DLAをやる時間が取れなかったら、評価だけでもしてみるという話。
- ・DLAの活用の仕方や事例についての話。(多数)
- ・結果を生かした指導について考える演習。(多数)

④受講者が今後に望む研修・授業の内容と活動(受講者アンケートⅣより)

1. 事例を聞く活動
2. 講義形式、
3. 設定したテーマに関する話し合い
4. 授業体験
5. 研究授業

(2) 研修企画の立場から見た、研修の成果と課題(企画者アンケートⅢの回答より)

<6月20日 生き方指導、発達支援教育>

- ・「言語か発達か」と決めようとせず、子供の姿に目を向けたいと考える教員が多かったこと。
(成果)
- ・ロールモデルの話はとてもよかったが、それが直接、指導をする上でのモチベーションにつながったかどうかはわからない。(課題)

<9月12日 DLA研修>

- ・DLAの使い方はある程度理解できている教員が多かったので、測定の仕方ではなく、測定を生かした指導について考えることができたこと。(成果)
- ・結果をどのように生かすかという演習を行ったので、研修参加者で共有しあう必要があったこと。(課題)

(3) 追跡アンケートの結果より

I 教員自身について

①現在の外国人児童生徒への教育活動について

経験年数

2年…5人 3年…2人 6年…1人 10年…1人 20年…1人

②立場

日本語指導担当教員 小学校…7人 中学校…3人

③どのような指導を行っているか

取り出し指導で日本語・教科を教えている…10人

II 研修後について

① 研修で学んだことについて、指導・支援で意識していること

- 子供たちが興味をもって楽しく学べるように、どうやったら楽しいかヒントとなるようなことを考えている。
- 個に合った指導(複数)
- 児童の悩みや困り感の解消
- 外国人児童がどんなことにつまずくのかを探るようにしている。
- 日本語がわからなくても、簡単に伝える方法を考えている。

- 担任や他の支援者と歩調を合わせた支援を心掛けている。
 - 教材の本質を押さえつつ、児童の実態にどこまで迫った指導が工夫できるか。
 - 実物・写真を見せたり、動作化を取り入れたりしている。
 - 教科の目標と日本語の目標の両方を、常に意識するようにしている。
 - 外国人と日本人のギャップを感じているが、それを乗り越えて、外国につながる生徒や保護者とどうかかわっていくかを考えるように意識している。
- ② 指導において、研修後に工夫や改善を試みていること
- 教科書の設問を自分の口で読ませ、読めない文字には自分でルビをふらせる。
 - 高学年ではルビふり教材を使用している。
 - リライト教材を使用したり、教材にルビをふったり、学習ワークシートを工夫したりしている。
 - 板書にはルビをふる。(複数)
 - 翻訳文書は個人別の封筒に入れて渡し、保護者の印をもらって返却してもらう。
 - 帯時間を設定し、個別の課題に対応している。
 - 読書指導の工夫をしている。
 - 1時間の中のどこかで動作化できる場面をどの学年にも作ろうと意識している。動作化することで体が覚える。表現する楽しさを味わえる子が多い。
 - ITを中心に授業を行っている。
 - リライト教材は母国語を参考に載せている。
 - 保護者への通知には、わかる限り辞書で翻訳した単語を付けている。
 - 保護者への大切な通知は、「IMPORTEANTE」「ENTREGAR」の印を作ってもらい、活用している。
 - 文書は色を変えるなどして出す。
- ③ 今後、参加してみたい研修について
- JSLカリキュラムについての研修(複数)
 - 発達支援について
 - 教材作り(複数)
 - 指導案作りのポイントを学ぶ
 - 子供たちの今後について、保護者への声掛け等を学ぶ研修
 - ワークショップ形式で実践力を高める
 - グループになっての実践発表会
- ④ 「外国人児童生徒の教育・指導・支援」にかかわる経験の、自身にとっての価値や意味
- 外国人労働者に関する法案が国会で審議されているが、支援内容は不十分であり、現場の状況は過酷である。加配教員がない場合、外国人指導は後回しになることが多い。外国籍児童であっても日本の教育はしっかり受けるべきであり、それを保護者に理解させるための役割は、今後の日本にとってとても重要なことであることを知ることができた。
 - 子供の個性や多様性を認めた上で、指導に当たることができる。自身の見聞も広げることにつながる。
 - 「個の実態をつかみ、指導を工夫する」という点で、教育の本質を見つめ直すチャンス。
 - 全て“人”と対応している意識が強くなっている。○○だから、という言い訳がなくなっ

ている。

- 近年、日本、浜松に増加している外国人に対して、文化の違いを理解しようと思うようになった。
- ようやく今まで外国人支援をやってきたことがつながってきている。毎日、とてもやりがいがある。
- 異文化を知ることで、日本人でも一人ひとり違うこと、また、外国の生徒も含め、その違いをうめる努力が必要であるということ。
- 一般の児童が、どんなところでつまずくかがより分かるようになり、支援の幅が広がった。

4. モデルプログラムについて

(1) 養成・研修内容構成（報告書 pp. 72-76）について（意見）

- ・追加が必要な項目はないか。
追加が必要な項目については特に必要ないと考える。
- ・項目の構成（配置・カテゴリー化）は適当か
適当であると考えます。
- ・項目の数や具体性は適当か。
数は適当だと思いが、指導面（JSLカリキュラム等）、日本語測定（DLA）などがもっと具体的に載っていると使いやすい。

(2) モデルプログラム（報告書 pp. 207-244）について（意見）

- ・90分程度のモチーフ型のプログラムは、選択・組み合わせがしやすかったか。
どこの分野からもってきてよい、項目を自由に組み立てよい、というところが使いやすい。
- ・モデルプログラムは実施カリキュラム作成時に、参考になったか。
指導をするに当たり、どのような資質を身に着けたらよいのか、どのような流れで研修を組み立てたらよいのかということが分かり、参考になった。
- ・講義・活動・フィールドのバリエーションは、活動を考える上で役立ったか。
様々なやり方があるということが分かり、いろいろな形で試してみたいと考えている。今回は教員の研修だったが、母語支援員等への研修としても活用できそうなので、ぜひ活用してみたいと考えている。

(3) モデルプログラムの活用で研修の運営が円滑になったか。

- ・現場の課題と研修内容を関連付け、受講者に目的を伝えやすくなったか。
現場の課題に応じてカリキュラムを作るため、研修内容が明確になる。目的がはっきりし、受講者にも伝えやすくなったと思う。また、講師を紹介していただいたことで、研修の幅が広がった。
- ・企画者と講師間で研修運営についての考えを共有しやすくなったか。
1時間分のカリキュラムをしっかりと立てることで、自分自身も研修の流れについて深く考えることができたことと、講師へ依頼する際にもカリキュラムに基づいて話をするので、運営については考えを共有しやすくなったと考えている。ただ、カリキュラムを作ったことで安心し、しっかり確認を取らずに研修を進めてしまったこともあったので、講師との連絡はしっかり取りながら進めていく必要がある。

- ・複数回の研修の場合には、各回の関連付けがしやすくなったか。

外国人児童生徒への指導に必要な項目が分かり、見通しをもって研修計画を立てることができた。ただ、教員への研修は内容が決まっているものが多く、他の項目についてなかなか研修の時間を取ることができない。必要なことを研修できるように、時間等を工夫しながら研修を進めていきたい。

- (4) モデルプログラムの活用を通して、研修・養成で、どのような力を高めてほしいか。あるいは、高めるためには、どのような活用の仕方が必要だと思うか。

高めたい力は実践力。研修を受け、現場で指導したりコーディネートしたりできる力が付くとよいと考える。そのためには、話を聞いた後どのようなプランが立てられるか考える時間があるとよいと考える。